

細石器 (VI)

—細石器の果たした役割—

藤本 強

1

1990年, 1992年, 1994年, 1995年, 1996年の5回にわたり, 「細石器」と題する論文を本紀要に掲載してきた(藤本1990, 1992, 1994, 1995, 1996)。このうち1990年は, ロシア極東地域と北海道の細石刃を比較した内容を含むものであり, 1992年はヨーロッパにおける細石器の分類とその在り方を見ている。1994年, 1995年, 1996年のものは, シリア砂漠周辺の細石器の在り方を中心にしてきたものであり, そこで細石器の果たした役割について考えてきた。これらを通して, 製作の段階の問題にも触れてはいるが, むしろ細石器の機能を中心にした使用の段階を主にして考えてきた。細石器がいかに使われ, それが人々の生活にどのような役割を果たしていたのかを主題にして述べてきた。今回はこれらを通観して考えたことを述べまとめとしたい。

これらを通じて確認できたことは, どこの地域においても, 細石器は形態としての器種を異にしても大きさの上では共通した変化があり, それは細石器の役割の変化を象徴しているということである。形態が同一であっても, 大きさによって象徴される機能には大きな違いがあったであろうことも推測できている。形態が機能にはすぐに結び付かないところに細石器の特徴があるということができよう。この点が新石器文化以降の石器と違うもっとも大きな特徴である。また, 形態の変化と機能の変化は必ずしも同一時期に生ずるものでもないことも確認できている。むしろ形態の変化と機能の変化は別個の時期に生じていることが多いように思われる。というのは形態の変化と機能の変化はまったく別の次元で生じるからである。両者は相互に密接な関係はなく, 別個の要因で変化したと考えるのが妥当であろう。

後期旧石器時代には西アジアやヨーロッパをはじめとして, かなりの地域で石器の器種の分化が見られはするが, なお, 石器は器種と機能が一対一では対応していない万能の道具であった。細石器はその在り方から見てこの性格をよく受け継いでおり, 旧石器時代の石器の系譜をひいているということもできよう。これが新石器時代には大きく変化し, 旧世界のほとんどの地域でそれぞれの地域に応じた形の, 個々の仕事に対応した独自の専用の石器が誕生する。それぞれの地域の生業と暮らしに応じた独特の石器が出現する。人類の社会にとって新石器文化を導入することはきわめて大きな画期であるが, こと石器製作と使用に限ってみても新石器文化の導入は人類史上最大の画期

であったということができよう。

すなわち、ある基準的な製作法によって作られた一定の形態の石器をさまざまな用途の道具として使い分ける旧石器文化的な石器の在り方からそれぞれの仕事に適した専用の石器を作り、それぞれの仕事に応じた石器を専門的に使う新石器文化的な石器の在り方への変化である。石器製作という観点から見ても、4～5百万年続いてきた石器の製作と使用の在り方を根本的に変える大転換の時期とすることができよう。旧石器時代的な石器製作と使用から新石器時代的な石器製作と使用への転換が行われたこととそのもつ意味を改めて確認しておく必要がある。その橋渡しをしたのが旧石器時代から新石器時代への移行期に出現する細石器ということができよう。

2

細石器は差し替え可能な特殊な万能の石器という側面をもっている。これが細石器のもっとも大きな第一の特徴ということができよう。旧石器文化にあっては、特に西アジアやヨーロッパなどの地域の後期旧石器文化では、個々の石器がある一定の形態をもち、それがその石器固有の仕事をしてきたように考えられていることが多いが、使用痕の分析などによる使用の具体例の研究によると実態は必ずしもそうではなく、多様な仕事に使われていることが推測されている。これらの石器と同様に細石器の使用も形態、器種を越えてさまざまになされている。しかしながら、細石器が後期旧石器時代の石器と大きく異なる点は、細石器は個々の石器がそれ自身では完成された道具ではなく、柄のような他のものとまた他の細石器と組み合わせられて、はじめて道具になるという特徴をもっている点にある。後期旧石器文化の石器は単体で、それ自身が完成された道具であり、たとえ柄と組み合わせられる場合でも道具の完成された一部にほかならない。ところが、細石器の場合には単体ではそれ自身道具ではなく、道具の単なる一部の部分品でしかない。柄及び他の細石器と組み合わせられることによってはじめて道具になるという特徴をもっている。これが細石器の第二の大きな特徴である。

したがって、同一の形態の細石器であっても、柄や他の細石器との組み合わせいかんでは、全く異なる機能の道具ができ上がることになる。総体としての道具の限られた部分品というのが細石器がもっている機能である。この点が旧石器文化の石器ともっとも大きく異なる特徴とすることができよう。こうした細石器の特徴を念頭において当時の人類の道具の総体の中で、細石器のもっていた役割を考えていく必要がある。

もちろん、細石器を含む石器群は、比率はそれぞれの石器群によって異なるが、細石器以外の各種の石器を含むのが常である。これらの石器は時期及び地域、さらには明確に結論を出すことは現在不可能ではあるが、季節、それに応じた遺跡ごとの生業により、その比率が変化したであろうことが推測される。細石器とそれ以外の石器の比率は同一時期、同一地域の中にあってもさまざまである。細石器を含む石器群の中に、細石器が二次加工を施された狭義の石器の90%以上を占める石器群もあれば、わずか10%にしか過ぎない石器群もあり、石器群ごとにさまざまな様相が見ら

細 石 器 (VI)

れるが、このような在り方はそれぞれの石器群の中で細石器が担っていた役割の大きさを示しているものと考えることができよう。それはそれぞれの石器群ごとにきわめて多様な在り方をしている。一方、巨視的に見れば、近接した時期、地域の石器群の間には一種の共通した様相が看取される場合が多いのも事実である。

同一形態の細石器を含む時期もほぼ同じ、地域も近接している石器群同士でも比率が酷似している場合が通例であるが、比率を大きく異にしていることがあることも稀ではない。こうした石器群は通常同一の文化に所属していると考えられるが、比率を主体に考えれば同一の文化に所属しているとはいいいきれないことにもなる。これをどのように考えるかは考古学にとってもきわめて重要な課題である。季節の差と考えるのか、そこでなされていた仕事の差と考えるのか、個々の集団の差と考えるのか、あるいはこれら以外の要因による差と考えるのか、またこれらのいくつかが複合した結果なのか、それを一般的にいうことは困難である。さまざまな要素を考慮に入れて個々のケースごとに考えていく必要がある。

こうした遺跡ごとの細石器の比率の違いは、細石器の役割を考える際の一つのヒントになり得よう。単体としての石器と道具の単なる部分品としての細石器の比率が石器群ごとに大きく異なる場合、細石器が担っていた仕事が石器群ごとに異なっていたと考えるのが可能性が高いように思われるが、必ずしも一概にいえることではない。前回に概括的に見たパレスティナの Natuf 文化の場合などは、ある種の仕事を担っていたと推測される石器（鎌の刃）と製粉具が相関しながら推移しているので比較的考えやすいが、例えば、ナイル河中流域にある Kubbania 文化の場合（藤本 1983b）には、季節を異にして利用されたと推測されている地点の石器群相互の間に明確な差は見出されていない。こうした例に見られるように、石器相互の比率のもつ意味は個々のケースごとに考えることが重要になる。

それぞれの遺跡で細石器が何に利用されていたのかも必ずしも明確ではない。道具の部分品であるので、同一規格、同一形態の細石器であっても多様な使い方がなされていたことも考えられる。筆者自身が行ったシリア砂漠のなかの細石器の使用痕分析（Fujimoto 1983, 1988）によっても、全てが明らかになっているわけではないが、少なくとも同一形態、同一規格の細石器が多様な使い方をされていたことだけは確かである。細石器についている使用痕には各種のものがあ、その比率が変化していることも確認できている。

細石器の用途を考える際には、細石器についている使用痕の分析による直接の証拠を求めるのがもっとも望ましいが、現状では多くの制約があり、確実に使用痕の認定を行うことは困難である。次善の策として、それぞれの地域で細石器が消滅する際に新たに登場する石器から細石器の用途を推測する方法を採らざるを得ない。この場合、生業をはじめとする生活様式に他の地域からの伝播などの要因で急激な変化が起きているところではこの方法は採り難いが、細石器を使用している生活から徐々に新たに登場する石器を使う生活に移行している地域にあっては、こうした方法を採用することができよう。

これまでに見てきた日本列島を含む東北アジア、西アジア、ヨーロッパでは、結論から先にいってしまえば、細石器に代わって登場し、その役割を代替したと考えられる石器は石鏃あるいは石槍であり、石鎌あるいは石鎌の部分品である。東北アジアと西アジアでは、その変化の様相は異なるが、細石器が消滅し、新たな石器が登場するときには、類似の生業が継続していたと推定できる状況にある。東北アジアでは狩猟・漁撈が主体となり、これに採集が加った生活がこの時期になされており、主要な石器は狩猟・漁撈に関係したものであり、細石器が消滅するとこれに代わって登場するのは石鏃もしくは石槍である。もちろん石斧、磨石、石皿というような植物資源に関連する石器類が出現するが、これは細石器のもっていたであろう役割とは関わりあいがないものと考えることができる。

西アジアにおいては、生業の主体は野生の草食獣の狩猟と植物資源、特に穀類の、採集にあったものと考えられる。細石器はこの二つの主要な生業に用いられていたものと思われる。ここでは細石器が消滅して新しい石器が登場するのは、農耕と牧畜の開始と密接に関係している。生業形態は穀類の農耕と草食獣の牧畜と従来の生業形態が一変する。しかしながら、細石器使用時に主として狩猟されていた草食獣が家畜化され、それを牧畜しているのであり、また、採集されていた主要な穀類が栽培化され、それを農耕している。生業形態は一変しているが、対象となった動物と植物には大きな変化は見られない。しかもそれらの進行は徐々に進められており、移行の様相も具体的に捉えられるようになっている。

ここで細石器が消滅して、新たに登場するのは、石鏃に用いられたものと考えられている尖頭器と鎌の刃である。その移り変わりは徐々に進行するものであり、細石器のもっていた役割を新たに出現したこれらの石器が担ったことは確実と思われる。もちろん西アジアにおいてもこのほかに石斧、効率のよい製粉具などが見られるようになるが、これらの石器の機能を細石器が果たしていたと考えることが困難である。これらの石器はかなりの重量があることが必要であり、また、大きな力がかかることを特徴とする道具であり、細石器のもっている軽量、鋭い刃という属性上の特徴とは相容れない性質であるからである。

ヨーロッパでは、東北アジアや西アジアと状況の上で大きな違いがある。ヨーロッパといっても地域によって大きな違いがあり、一概に述べるのは困難であるが、この地域に新たに登場して新石器時代を通して使われる石器類の多くはヨーロッパ内部で成立したものではなく、他の地域からもたらされたものである。細石器が使われている時にはここでは狩猟、漁撈、採集を組み合わせた生活がなされていたと考えられているが、新たな石器はバルカン半島を経由して西アジアから農耕と牧畜がもたらされたことにもなって出現する。

したがって、新しい生業とともに新しい石器が現われるという劇的な変化が見られる。それは徐々に進行するのではなく突如変化する。もちろん農耕と牧畜の登場はヨーロッパのなかでもかなりの遅速がある。かなり長期にわたってヨーロッパ内部に狩猟・漁撈・採集による生活と農耕・牧畜による生活とが併存していた。ある時期をとると同一地域にあっても両者がともにあったことも

細石器 (VI)

確認されている。石器の面から見ると、細石器と新たに登場する石器とがかなり長い期間ヨーロッパでともに用いられていた。

ヨーロッパでは生業も石器も他の地域からもたらされたものにより一変するのであるから、ヨーロッパにおける細石器の役割を新たに登場する石器から考えるのはある意味では無謀である。ここでは、もちろん変容はしてはいるが、他の地域で完成された石器群が出現して細石器は消滅する。一部ではあるが、細石器が特殊な石鏃に変化しているのをヨーロッパ内部においても見ることができる。それは台形細石器 (trapeze) が変化したと考えられる直箭鏃 (transversal arrowhead) と呼ばれる石鏃である。これは明らかに台形石器がその形態の一部を特殊化させたもので、細石器とともに使用されており、ヨーロッパにおいても細石器のもっていた役割の一部は石鏃に置き換わっていたことを示している。

こうしてみるとこれらの広範囲の地域では、細石器の役割を細石器に代わって担うのはいずれも直接生産に関わる石器である。このことは細石器が、少なくともその大部分は、直接に生産活動に関わる役割を担っていたことを示していることになる。これらの地域で共通して見られるのは、新石器時代に細石器に代わって登場するのは石鏃であり、鏃の刃である。狩猟活動に直接関わる石鏃及び採集活動あるいは農耕の収穫に直接関わる鏃の刃、この役割を細石器が担っていたことになる。こうした直接生産活動に関わる石器以外の道具は生活を維持管理するための道具であったものと考えられる。こうした道具には細石器を含む石器群にあっても単体の石器が当たったものと推測される。

その典型的な例は広義の削器である。削器は後期旧石器文化以来、地域と時期によってさまざまな形態のものが見られるが、細石器が盛行する時期を通して、さらに新石器文化になっても多くの地域で単体の石器が用いられている。削器の用途自体さまざまなものがあり、一概に決めることはできないが、それが生活の保守管理に関する仕事に主として用いられていたことは多くの人々がほぼ一致して認めているところである。このような石器は細石器で置き換えられてはいない。直接生産活動に携わる石器に細石器がなっているというのが、細石器のもっていた役割のもう一つの特徴であるということもできよう。

この点は先に述べた細石器の二つの特徴、差替え可能な万能の石器という点と道具の単なる部分品という点に密接に関連しているものと思われる。直接生産活動に携わる道具は生産現場に生活の拠点からその都度もち出して使用するものである。細石器は軽量であり、しかもそれが構成している道具の一部が破損したならば、部分品としての細石器をその部分だけ差し替えればすぐに修理ができ、道具として再び使えるようになる。こうした細石器の特徴は、生産現場という生活の拠点から離れた場所で最大の効果を発揮する。しかも生産現場で使用する各種の石器に共通した部分品であり、それを使って短時間で道具の修理が可能になる。植物の採集に使用する鏃の刃としても、動物の狩猟に使用する石槍もしくは石鏃としても、同じ細石器を携行していさえすれば、生産の現場で道具の修理がすぐにできる。これは単体の石器にはない特徴である。しかも細石器自体すこぶる

軽量であるので、生産現場に携行するのにこれほど便利なものはないともいえよう。

組み合わせにより、各種の道具の部分品にすることのできる細石器ならではの至便さということができよう。しかも細石器が盛んに用いられた時期は季節に合わせた多彩な生業を可能にするために、点々と生活の拠点を移す移動生活が多く地域でなされていたものと考えられている。移動生活をするのであれば、道具はなるべく少なく、しかも軽量であることが望ましい。そうした条件にもっとも適した石器が差し替え可能な道具の部分品としての細石器であったのであろう。細石器は移動生活をする際の最適の道具であったものと考えることができる。

しかしながら、万能の道具であった細石器も万能の道具であるが故にもつ欠点を種々の面でもっていたのはやむを得ないことであった。細石器が部分品になる道具は軽量であり、用途に応じて各種の道具になるという至便さを備えてはいるが、便利さを求めるが故に、作業効率は落ちるという特徴をも備えている。専用の道具ではないので、実用的な効率は二の次になっている。しかし移動生活が中心の生活様式であった時には、作業効率よりも細石器のもつ軽量と修理が容易であるという至便さが重視され、細石器が作業効率の犠牲の上に用い続けられたと推測することができる。季節ごとに資源のある場所を点々と移動し、その時々資源獲得の単位時間あたりの効率を求める生活様式にあっては、道具は実際の生産現場における作業効率よりも運搬の際の効率を求め作られていたと考えることができよう。

ところが、定住を前提にした新石器文化になると、ある地点に年間を通して居を定め、その居住地から一定の時間内で獲得可能な資源を基にして生活をするようになる。いわば単位面積あたりの効率を重視した資源獲得を優先する方式に移行する。居住の拠点を中心にして一定の範囲内にある資源で年間を通して生活をする方式になる。年間を通して移動する手間は省けるが、日常の資源獲得にはその資源のあるところまで時間をかけて出かけなければならないし、獲得した資源をそれを主として消費する居住拠点まで持ち帰らなければならない。移動生活に比べ、日常的には資源のある場への、言い換えるならば、直接生産現場への往復により多くの時間を要することになる。この点は比較的に考えられることが少ない点であろう。

さらに、居住拠点は年間を通して資源の獲得に有利な場所が選ばれたのであろうが、その選地次第では季節季節の資源獲得の効率が大きい異なる。それに依りて季節ごとの獲得戦略を定める必要もあるし、それぞれのときに使う道具の開発も重要になる。

また、居住拠点の選択いかんによっては、ほとんど、ある場合には全く獲得することのできない資源も生じることにもなる。移動生活をしていて他の集団との摩擦がない場合にはこうしたことはほとんど起こらない。定住をするということはさまざまな点で人類に展開の可能性をもたらしたと考えられがちであるが、移動生活に比べて多くの点で不自由さをも惹き起したのである。単位時間あたりの効率から単位面積あたりの効率への転換はある意味では人類の生活のさまざまな面に劇的な変化を惹き起したとも言うことができる。

単位面積あたりの効率を高めるためにさまざまな新しい生業が出現した。あるいは同じ生業で

細石器 (VI)

あっても、その具体的な方法が全く革新された。それまでには余り顧みていなかったり、重要視していなかった資源の新たな開発とそれを可能にするさまざまな新しい資源獲得法が生み出され、またそれらの資源に対応するための多様な調理法が合わせ開発された。これらなくしては単位面積あたりの効率を重視する定住生活の成立は不可能であった。

これには大きな発想の転換が必要である。発想の転換があってはじめて年間を通しての一定地点での定住が可能になる。逆に言えば、定住生活を営むようになったので単位面積あたりの効率が求められ、それまでの単位時間あたりの効率重視からの根本的な発想の転換が求められるようになったのである。それは生活のハードな面、ソフトな面の両面にわたっているのであるが、考古学資料に現われるのは主としてハードな面における転換である。これは正に細石器からの転換ということになる。

定住生活をするということは移動生活に伴う運搬の負担から人類が開放されるということの意味している。また、単位面積あたりの効率を高めるためには、さまざまな仕事をする際に効果的な道具により効果的な仕事が行なえるような配慮が求められる。それを可能にするのは移動生活をしている時には頻繁に起こる運搬を無視して専ら使用時にその道具としてもっとも効果的な道具を追求することになる。

ここに道具の革新が生じる。単位面積あたりの効率を高めるためには、新しい資源の利用法をも含めた開発、そのための効果的な道具の確立、この二つがもっとも求められるものである。土器や製粉具といった新たな道具の開発もなされるが、細石器が持っていた機能を受け継ぐ石器の開発も同様に重要である。特に、生産の最前線で使用される道具が効果的になることは単位面積あたりの効率を重視するように転換した生活のためには必須のことである。

新石器時代になり、運搬のことを考慮しないで、使用時に最大の効果を発揮するように作り出された道具が石鏃・石槍であり、鎌の刃である。万能の道具から専用の道具への転換である。再び単体の道具が成立するようになるが、それはもはや万能の道具ではない。明確な用途をもった専用の道具である。固有の目的をもち、そのために開発された道具である。単位時間あたりの効率重視から単位面積あたりの効率重視への転換に伴う新たな道具の成立である。

このような新しい道具の出現は、これまでに見てきた地域で若干時期は異にするが、巨視的に見ればほぼ近い時に生じている。細石器の出現にもほぼ同じことが言える。従来言われていたような更新世から完新世への気候の変化がこうした転換の直接の引き金になったという仮説には疑問があるが、細石器の出現とそれに続いて起こる新石器文化的な石器の出現は更新世から完新世への移行に前後する頃に生じているのは紛れもない事実である。それぞれの地域で詳細に見るならば、気候の変化の時期と石器の変化の時期は微妙に食い違っており、その間に因果関係を認めることには躊躇せざるを得ないが、状況としては、これまでにかなり詳細に見た諸地域で類似の年代に二つの転換は起きている。

3

このような転換とその間にあって細石器が果たした役割はこれまでに詳細には見ていない旧世界のさまざまな地域においても基本的には認められることである。もちろん旧石器文化に比べ、より多様化する各地の新石器文化の在り方に対応して出現する新石器文化の石器は多様である。しかし、多くの地域に共通する様相を捉えることは可能である。それらの地域を概観することにする。調査が十分でない地域も多く含まれており、資料の入手が困難な地域も多いので十分ではないが、管見した範囲で概述する。これら地域の状況を踏まえ、次の項で細石器のもっていた役割について考えることにしたい。

アフリカは北アフリカを除き、その情勢はあまり明らかではない。北アフリカは地域によりかなりの違いを見せてはいるが（藤本1983b, 1988など）、更新世の末期から完新世の初めにかけて細石器が盛んに使われる地域である。地点ごとによりかなりの様相の違いがある。ナイル川流域では地点ごとに石器群のあり方が違つてまで言えるようなきわめて複雑な様相が見られる。また、同一時期と考えられる石器群の間に器種構成も器種の比率も全く異なる石器群があることも少なくないが、多くの石器群で細石器が石器群の主要な構成要素として用いられている。細石器の機能であるが、概していえば、ナイル川流域の細石器は野生動物の狩猟と植物の刈り取りに使われていたように考えられる。ごく一部ではあるが細石器の用途について直接的な証拠も得られている。細石器の金属顕微鏡による使用痕の分析がなされ、細石器がイネ科の植物の刈り取りに使われていたことも確認されている（藤本1983b）。

ナイル川流域の細石器の消滅については、状況は全くつかめていない。bc. 1万年を前後する頃以降、新石器文化が定着するまでの間の数千年間に所属すると思われる遺跡が、ここではほとんど確認されていない状況にある。その原因については種々のことが提唱されているが、それぞれの仮説には一長一短があり結論は出ていない。それまでにこの地域にあった初期の植物利用の痕跡も辿ることができなくなってしまう。ごく一部ではあるが、また、定型的な石器が成立しているわけではないが、粗雑な二次加工を施された剥片がイネ科の植物の刈り取りに使用されていた例が、bc. 1万年前後とされている Isna 文化と呼ばれる文化層で確認されている。ここには製粉具かと思われる石器の存在を含め、穀物利用を思わせる間接的な証拠が多数得られている。こうした状況を見るとナイル川流域においても一部の細石器の機能が穀物の刈り取り具の機能をもつ石器に置き換わった可能性がある。

ナイル川の西に広がるエジプト領のサハラ砂漠においては細石器から新石器文化的な石器への徐々の移行が確認されている（藤本1988）。これらの石器群はナイル川流域の細石器を含む文化がサハラ砂漠に進出したのではないかと考えられている。ここでも細石器に代わる石器は石鏃に使われたと考えられる各種の尖頭器である。ここには農耕が独自に開始された若干の証拠があるが、明確に刈り取り具と考えられるような石器は、少なくともこの地域の新石器文化の早い段階では確認

細 石 器 (VI)

できていない。その後になり、西アジア起源と考えられる農耕文化がここにも浸透してくると、一度変わったこれらの石器群はまた変容する。西アジア起源の本格的な農耕文化導入により、明らかに刈り取り具と考えられる石器が出現する。この段階で北アフリカの伝統的な石器製作・使用の伝統は大きく変貌を遂げる。

チュニジアやアルジェリアを含むいわゆるマグレブ地方では、幾何学形細石器の粹とも呼べる非常に発達した幾何学形細石器が見られるのが特徴であるが、ここでも徐々に幾何学形細石器はさまざまな形態の石鏃に置き換わっていく。削器を初めとする単体の石器が類似の形態で新石器文化と呼ばれているものの中に受け継がれているのと対照的に幾何学形細石器はその形態を次第に変化させながら、石鏃に収斂していく。これはナイル川流域にも見られることであるが、マグレブの場合により典型的に見られるものである。

台形もしくは三角形の幾何学形細石器の尖った部分、言い換えれば台形もしくは三角形の角が次第に長くなり、狭長な形態を取るようになる。二次加工は周縁部にのみ留まっておき、非対称形ではあるが、形態は三角形の石鏃に近づいていく。これとは別の形の変化も認められている。典型的なものは東サハラと呼ばれるエジプト領サハラで確認されている。この地域の幾何学形細石器はマイクロ・ビュラン技法と呼ばれる特殊な技法によって作られていることが多いが、新石器文化の一部の尖頭器はマイクロ・ビュラン技法によってその製作がなされていることが確認されている。菱形もしくは三角形の体部に茎のついた石鏃であるが、その茎部の作出にマイクロ・ビュラン技法が用いられている。マイクロ・ビュラン技法を行なう部位を幾何学形細石器の場合と変えて行ない、意図した尖頭器を作り出している。これも技術的には、幾何学形細石器の製作技術の伝統の流れを汲むものであることは確実である。

以上のように、北アフリカでは細石器の機能を受け継ぐ新石器文化の石器は石鏃に使用されたと考えられるさまざまな形態の尖頭器である。これに一部で穀物の刈り取り具の機能をもつものが出現している可能性があるが、西アジアほど明確なものではなく、その存在の可能性を指摘するに留まる。北アフリカでは、細石器の機能は動物の狩猟に用いられた狩猟具が主体であり、一部植物の刈り取り具が存在したということがいえよう。

サハラ以南のアフリカには、幾何学形細石器を含む細石器はかなりの数あるようであるが、その実態は調査が限られており明らかではない (Phillipson 1977, 1982など)。細石器の出現と消滅すらはっきりとはわからない。まして、この地域の細石器の機能ということになると、ほとんどわからないという状況にある。細石器と石鏃が存在したことは確かであり、石鏃が細石器に代わった可能性を指摘することができようが、確実さに欠ける。この地域の細石器は新石器文化の成立が遅れることもあり、比較的遅い時期まで残存していたと考えられる。このことは確実と思われるが、新石器文化とされるものが、他の地域とはかなり異なった在り方を示しているようなので、これまでに見てきた地域と同じように考えてよいのかも明らかではない。この地域では、細石器の在り方を含めて独自に考えていく必要もあるように考えられる。農耕と牧畜の導入を含め、他の地域とは別

の尺度で考えるのがよいように思われる。今後の調査の進展を期待しておくことにする。

南アジアも詳細な情報が得られていない地域である (Allchin・Allchin 1982など)。幾何学形細石器を含む細石器が存在していることは確実であるが、その出現から消滅に至る過程は不明としかいいようがない。後期旧石器文化に関しても同様の状況にあるので、細石器がどのようにして出現して、それぞれの石器群の中でどのような役割をもっていたのか、それぞれの時期の生業がどのようなものだったのかというような生活の実態に関する基本的な事柄すら明らかではない。

南アジアと一口に呼ばれるが、インダス川流域、ガンジス川流域、デカン高原に代表される環境も気候もいちじるしく異なる地域を内包しており、その中であっても高度差などの要因により、多彩な環境から成り立っている。新石器文化の展開にしてもこれらはそれぞれに独自のものをもっており、一概にまとめることは不可能である。

すなわち、インダス川流域においては、現在の時点で見るかぎり幾何学形細石器を含む細石器が比較的多数あり、また、独自に新石器文化が誕生した可能性もないことはない。しかし、ある時期以降の展開は、西アジア起源の新石器文化の少なくとも一定の影響の基に、さらにいうならば西アジア起源の新石器文化の直接の波及が基本にあったとすることができる (藤本1989)。インダス川流域固有の要素は希薄になるということができよう。冬雨地帯の東縁にあり、基本的には乾燥地帯が卓越する環境は西アジアに連なるものであり、こうした基本的な環境条件を考慮に入れて考えていく必要もあろうが、データの不足はいかんともし難い。

ガンジス川流域は夏に豊富な雨の降る地域であり、インダス川流域とは対照的な環境にある。気候的に見れば、東南アジアにつながる地域であり、さらには東アジアにも一定の関連があろう。細石器はないことはないが、定型的なものは比較的少数に留まるようである。インダス川流域と異なり、現在でも稲作が卓越する地域である。詳細は明らかではないが、稲作を基礎にする新石器文化が独自に誕生した可能性が高い。

デカン高原はさまざまな気候帯を含むが、比較的乾燥しており、独自の環境下にある。現在でも農耕の中心になっているのはムギでもなければ、コメでもない、いわゆる雑穀である。インダス川流域ともガンジス川流域とも違った様相をしている。ここには細石器がかなりの比率で存在しているようであるが、詳細は不明である。他の地域で細石器が消滅している、かなり遅い時期まで細石器が残っていた可能性が高い。

このように南アジアの状況は地域ごとにより異なっていたように思われるが、それはあくまでも現状においてはという断り書きの下に推測したものにはほかならない。この地域の細石器の果たしていた役割については全く不明としかいいようがない。新石器文化の展開も南アジア内部の地域ごとに大きく異なっていた可能性が高いが詳細は不明である。

中央アジアもまた、情勢の不明なところである。幾何学形細石器を含む細石器があることは確かであるが、南アジアと同じように資料が決定的に少ない (Furmkin 1970など)。西アジアの東端になるイラン高原と連なる様相であるようにも考えられるが、詳細は不明である。細石器をめぐる

細石器 (VI)

状況がほとんどわかっていない。細石器の出現、展開の様相、その消滅も明らかではないし、その機能については全く不明としかいいようがない。後期旧石器文化の状況も明確ではない。調査の事例が少ないのも状況が明らかではない大きな原因であるが、イラン高原やアナトリア高原における後期旧石器文化の遺跡の数の少なさを考えあわせると、そもそも居住がきわめて限られていたことも十分に考えられる。イラン高原およびアナトリア高原においてこの状況に変化が見えるようになるのは、更新世の最末期から完新世にかけてであり、本格的に遺跡が増えるのは新石器文化が定着してからである。これについても地域的な偏りが認められる。遺跡の見られるのは限られた地域であり、無住かと考えられる地域が広い。

同じことがこれらの地域に比べ、状況がもう一つ明らかではない中央アジアにもいえるように考えられる。中央アジアではさらにこうした傾向が強いようにも思われる。調査が行きわたっていないのも原因ではあるが、細石器が使われていた時に人々の居住がきわめて限られていたことがもう一つの原因であろうかと思われる。

広大な地域でもあり、その内部における環境の偏差もあるように考えられるが、気候や環境条件の違いは南アジアほど激しくはない。基本的には、全体が乾燥地帯であり、冬雨になるところが多い。砂漠の面積も広い。この地域の新石器文化は、インダス川流域と同様に西アジア起源のものが浸透して成立したものであると思われる（藤本1989）。無住もしくはきわめて限られた数の人間しか居住していなかったところへの浸透かと思われる。西アジア起源のものがほとんど変容せずに定着している。確認されているかぎりにおいては、農耕を基礎に置く新石器文化の進出である。これにより細石器は見られなくなるのは、他の地域と共通した現象である。

南アジア、中央アジアに共通して見られる状況の不明確さは調査の数が限られていることが大きな原因ではあるが、それ以上に細石器を使用している時期の人類のこの地域への居住が少なかったことに求められるようにも思われる。ヨーロッパにおいて西アジアに起源をもつ新石器文化がストレートに拡散したのは、細石器をもつ人間がほとんど利用していなかった地域に限られている。細石器をもつ人々がその土地の自然環境に対応した文化伝統を形作っていた地域には農耕を基礎に置く新石器文化がなかなか定着しなかった。このことは南アジアの西にあるインダス川流域、中央アジアでは、後期旧石器時代から終末期旧石器時代を通して人々の居住がごく少なかったことを暗示しているとも考えることができよう。

東南アジアも状況がつかめていない地域である。島嶼部には細石器が見られる石器群もあるが、時期的には他の地域の細石器が盛行する時期に比べるときわめて遅いと考えられている時期のものである。こうした例を除くと、細石器はほとんど確認されていない。細石器を使用するような生業がそもそもあまり発達していなかったことも考えられる。伝統的に定型的な石器が発達しない地域でもある。調査件数も限られているが、細石器がそもそもほとんど製作・使用されなかったことも考慮に入れる必要がある。

東南アジアと同様にこれに連なる現在の中国の南部も細石器の製作と使用が顕著ではない地域で

ある。ここにも細石器がないことはないが、現状ではの断り書き付きではあるが、ある時期の石器群を特色づけるほどには確認できていない地域である。東南アジアについて述べたことを繰り返すことができよう。すなわち、細石器を使うような仕事がほとんどなされていなかったことを考慮する必要がある。

中国南部の早期新石器文化には、打製石器は少ない。石器は稲作農耕のための磨製石器が主体を占めている（中村1986）。狩猟具と考えられるものは骨で作られた骨鏃であり、これによってとられたシカを中心にする野生動物の遺存体も多数あるが、さらに目に付くのが魚の遺存体である。中国南部の早期新石器文化はかなり完成された農耕システムをもっており、とてもその初現的な様相をしているとはいえないが、ここには狩猟具にも漁撈具にも細石器が転換したと考えることができる道具は見られない。転換の様相は明らかではないが、道具の主体は完全に新石器文化的な様相を示している。細石器がしていたであろう役割が見当たらない。

同じようなことが中国の淮河、黄河流域の早期新石器文化にもいえる（藤本1983a, 1985）。石器は南部の早期新石器文化と同様に農耕用の磨製石器が主体となっている。一方、打製石器は少数であり、そのほとんどは削器によって占められ、狩猟具、漁撈具に使われたと考えられる石器は見られない。野生動物の遺存体はかなり多数になっているが、この狩猟に使われたと思われるのは、こちらでも骨鏃である。この地域の早期新石器文化もかなり完成された農耕システムが中心的な役割を果たしていたと考えられる。南部と同じように新石器文化が初現的なものでなく、発展した様相を呈しているため、一概にはいい難いが、やはり細石器が担っていた役割にとって代わったと考えられる石器は認め難い。

近年、より古い時期の石器群が確認されつつあるが、狩猟具や漁撈具に関しては、状況は似たようなものであり、細石器の役割を代わって担った石器は確認できない。中国の東北部には、東北アジアに連なると考えられる発達した細石器があり、その一部は山東半島にも達しているように思われるが、中国の東北部には石鏃が見られ、それに転換したことが考えられる状況であるが、農耕文化が中心の新石器文化の中には細石器がもっていた役割を果たした石器は見当たらない。

現状では新石器文化のかなり成熟した段階のものがわかっているだけであり、あくまでもその限りにおいてはの断り書き付きではあるが、中国東北部を除く、中国の黄河、淮河、揚子江流域などの地域においては、細石器の果たしていた役割は限定されたものであった可能性が強い。今後の調査によってより古相の細石器を含む文化が出現することが考えられないこともないが、そうしたものが発見されたとしても、細石器が道具の中で主要な役割をもっていた石器群が中心の時期が表われる可能性は低いものと思われる。食料は植物を中心にしたものであり、これを補う動物の狩猟や漁撈は石器以外の素材のもので作られた道具によって行われた可能性が強い。

4

以上に見てきたように、ヨーロッパ、西アジア、東アジアの北部、北アフリカ、南アフリカの限

細石器 (VI)

られた部分の諸地域を除き、細石器をめぐる状況はほとんどわかってはいないのが現状である。調査の少なさがその原因の一つの重要な鍵を握っていることは否めないが、どうもそれだけではないようである。細石器が盛んに使われる地域と時期に、細石器があまり、あるいは、ほとんど確認されていない地域と時期が広くあることは、細石器の役割とそれを使った人々の暮らしのことを改めて考え直す必要があるように思われる。これはあくまでも現在の状況においてはという断り書きつきのことではあるのであるが、調査の少なさと不十分なことだけでこうした状況が生じているとは考え難い。そこには何か理由があるものと思われる。

考古学の世界では、古くからどこかの地域で考えられた枠組があたかも世界中に適用できるという思い込みがあったように思われる。細石器についていえば、先ず他の地域に先駆けて調査が開始されたヨーロッパでその枠組が設定され、次いで調査がヨーロッパの研究者により進展した西アジアと北アフリカでその枠組がほぼ適応できることが確認された。そこでそれが世界中に適用できるという暗黙の了解ができてしまった。筆者自身この枠組の中で考える習慣がついてしまっており、そこから抜け出すのは難しい。それを各地の個々の資料に立ちかえってもう一度見直してみることも必要であろう。現状では資料の不足はいかんともし難いではあるが、そうした作業を通して枠組自体を見直す必要があるように思われる。

細石器があまり顕著には確認されていない地域には、大きく見て二つの傾向があるように考えられる。一つは中央アジアから南アジアの一部であるインダス川流域である。この地域は後期旧石器時代から人々の居住があまり明確には確認されていないところである。あくまでも可能性を示すに留まるが、これらの地域では、これらの時期に、人々の活動が希薄であったことが十分に考えられる。これらの地域に自然環境の面でも連なると思われるのが西アジアの北部、イラン高原及びアナトリア高原である。ここは現在の調査状況から、この時期にはかなり確実に人々の活動が希薄であったということが出来る。

これらの地域を通して、後期旧石器時代と終末期旧石器時代には、ここの人々の暮らし方に適した環境があまり得られなかつたか、人々の生活技術が環境の開発・利用に適したものではなかつたのか、人々がここの自然環境を好まなかつたか、あるいは別の原因であったか、もしくはこれらの条件が複合し、絡み合ったのかは明確にはわからないが、人々の生活活動が少なかつたことが考えられる。無住とはいわないまでも、人口がきわめて希薄であって、人々にほとんど利用されていなかった地域であったものと思われる。

また、以降の新石器文化の展開を見ると、ここにあげたいずれの地域においても、時期の遅速はあるが、ユーフラテス川中流域もしくはザグロス山脈南西麓に起源があると考えられる農耕文化がストレートに近い形で急速に浸透した地域でもある。考古学的な調査が比較的行き届いていると考えられる西アジア内部、ヨーロッパ、北アフリカへの新石器文化の展開を見ると、それ以前に遺跡がほとんど確認されていない地域、いい換えれば人々の暮らしの痕跡の希薄な地域には、新たな生活様式をもった新石器文化がストレートな形でしかも急速に範囲を拡大しつつ展開するが、それ以前

に遺跡が多数確認され、その地域の環境に適応した安定した生活が繰り広げられていた地域には、新しい生活様式をもった新石器文化はなかなか浸透しないことが確認できている。また、たとえ長い時間の経過の後に浸透したとしても、その文化要素は従来の伝統的な生活様式に基づくものにより個々の要素ごとに変容され、ストレートな形では浸透していないことが多い。自然環境に適応した文化伝統の根強さを改めて認識させられる。

このような新石器文化の浸透は、地理的な単元を基礎にするそれぞれの小地域ごとに異なっており、少なくとも浸透の初期にはそれ以前の生活様式との間でモザイク状の展開になっていたことも確認できている。それが次第にその地の新石器文化としてそれぞれの地域ごとにまとまり、浸透していったことも明らかになっている。新石器文化の展開は、起源地から同心円状に広がるのではなく、無住に近かったところでは遠距離まで達し、居住が顕著であったところではごく短距離で留まるといふ、ちょうど海の波が陸地の地形の影響を受けるような形で展開をしていたものと考えることができよう。

調査の比較的よくなされている地域の事例を参考にして、中央アジアとインダス川流域の場合を見ると、西アジア起源の新石器文化の農耕文化としてのストレートなしかも急速な浸透がある。このことから、それ以前には人々の生活の痕跡が希薄であったものと推測することができよう。後期旧石器文化以来、居住がきわめて限られており、他の地域で細石器が盛んに使われる時期には、人々はこの地域でほとんど活動していなかったのではないかと考えられる。

これまでにヨーロッパあるいは西アジアと広大な環境条件も異なるところを一纏めにして扱ってきているが、これらの地域にあっても人々の活動していた地点には地点ごとに大きな偏りがあり、地理的な単元ごとに見ていくなれば、活動が見られる地域がむしろ稀といってもいい過ぎではないほど活動域は限られている。前にも見ているように、ヨーロッパにおいては細石器が使用される時期になると遺跡数は激増する。それにも拘らず、人々の活動域は限られており、人々の痕跡の確認できない範囲はなお広い。小地域ごとに、時期ごとに見ると、人々の利用していた痕跡の明らかな地点はきわめて限られている。

今後の調査により確認される可能性はあるものの、中央アジアとインダス川流域の後期旧石器時代から終末期旧石器時代における人々の活動は限られたものであったということができよう。したがって、細石器が少数しか確認されず、それが細石器をめぐる状況を不明確なものにしている大きな原因であろうかと思われる。

他の要因が考えられるのが、南アジアの東部にあるガンジス川流域と東南アジアである。さらにここに東北部を除く、中国の東側の大部分も加えることができるように思われる。ここでは、細石器がそもそもあまり利用されていなかったことが推測できる。いい方を換えれば、細石器を利用する仕事がほとんどなされていなかったともいうことができよう。細かく見れば相違もあるが、総じて見れば、ここは他の地域に比べると、雨量が多く、夏雨地帯であり、森林が生い茂る条件に恵まれた地域である。ここでは細石器を大量に利用するのに適した生業が、ほとんど行われていなかった

細石器 (VI)

たと推測することもできよう。あるいは細石器に代わる材質のもので細石器の機能が担われていたことも考えられる。比較的調査の行き届いている他の諸地域では、新石器時代になると、細石器の機能は石鏃か石槍に代表される尖頭器に置き換わり、一部で鎌の刃あるいは石鎌によって取って代わられたことがほぼ例外なく確認できている。

ところが、旧世界の西部あるいは北部に比べると、植物の利用が古くから盛んであったと推測される東南アジアや東アジアの南よりの地域にあっては、旧世界の西部や北部で細石器が担っていたと考えられる役割が生業のなかで限られたものでしかなかったことが十分に考えられる。いい換えれば、細石器を使って旧世界の西部や北部で人々がしていた主要な活動、狩猟が旧世界の西部や北部ほど生業のなかで大きな比率を占めてはいなかったことが推測できる。東南アジアや東アジアでは、前期旧石器時代以来、旧世界の西部に比べると、植物質のもの利用が盛んであったものと考えられる。この伝統は新石器時代に至る間、さらにその後も長く保持されていたものと思われる。このような文化伝統と森林が広く広がるこれらの地域の自然環境の相乗効果により、植物に比重をかけた生活が営まれていたものと推測できる。

穀物を刈り取り、利用するならばともかく、実際に行われていたであろう木の実の収穫や根菜の掘りとりなどには細石器は利用すべくもない。そうした活動が中心の生活においては、細石器の出番はほとんどないことになる。細石器はその特質から軽微ではあるが、鋭さあるいは切れ味を求められる仕事に主として用いられたと考えられる。穀物はさておき、木の実の採取や根菜の掘りとり、さらにその調理などの仕事には鋭さを要求することはほとんどないと思われる。むしろ多少切れ味が鈍くても、重量のある道具が必要であったと考えられる。そうすると、細石器の役割はほとんどなかったと考えることができよう。

細石器の様相と在り方が明らかではない地域について、その理由を多くの推測をまじえつつ見てきた。単に調査が不十分であることだけがその理由ではないことを種々の角度から確かめてきた。調査がよくなされ、細石器が豊富にあり、その在り方が明らかになっている地域で考えられた細石器をめぐる枠組あるいは常識は必ずしも旧世界の中で一般的に通用するものでもないことを明らかにできたと考えられる。細石器はそれが得手の仕事をするために考案されたものである。細石器が得手の仕事は旧世界の西部あるいは北部においてはより多かったものと推測できる。それは動物の狩猟のために主として使われたものであろう。

狩猟が生業の主要な部分を占めるところでは、細石器は旧石器文化的な石器の製作と使用の究極の石器として登場した。そしてそれを必要とする地域と時期には大いに盛行するが、それをさほど必要としないところではさして流行せずに終ることになる。従来の枠組は、細石器を必要とした地域で組み立てられたものであり、それが常識化してはいるが、その枠組には納まり切らない地域と時期が広くあったことも事実のようである。人々の文化は時期をおって多様化するが、細石器をめぐるさまざまな状況も地域と時期により多彩である。その土地その土地の自然環境とそれに培われた文化伝統によって多彩な様相が出現することになる。

数ある新石器文化の定義の中で、新石器文化の最大の特徴をそれぞれの地域において定住を可能にする手段の開発と定義する（藤本1997）ならば、その手段を実現するもっとも重要な道具が石器ということになる。逆に、既に再三にわたって述べているように、細石器は移動生活を前提にする石器である。両者は全く相容れない性格をもっているということができよう。これが生じる最大の原因は、定住というそれまでの価値観を根本的に変更した生活様式の採用にある。時間あたりの効率から面積あたりの効率への変化である。細石器が多用されていた地域では、この変化はより大きかったことと考えられる。細石器は時間あたりの効率を求めるには最適の道具であった。移動生活をするためにはもってこいの道具であった。したがって、時間あたりの効率を追求する旧石器文化的な生活様式においては、究極の石器といわれるのもまた当然であろう。

軽量であるだけでなく、道具の一部を部分品化することで、運搬の効率化、石材資源利用の徹底化を実現し、時間あたりの効率を最大化することに成功した。それは生産現場において最大の効率化を具現したものであった。その生産現場は動物の狩猟・漁撈が中心であり、それに植物、主として穀物の採取が加わるものであった。このような生業が中心であった社会においては、細石器は盛んに使用されたが、他の生業もしくは生活様式を採用していた社会においては、細石器の製作・使用は限られたものに留まっていた。地域ごとの文化伝統と自然環境の違いに配慮しつつ、社会の在り方と其中で果たした細石器の役割を細かな地域ごとに見直す必要がある。

細石器は人々の生活の範囲を拡大したことも確認できている。西アジアやヨーロッパにおいて、それまでに居住の見られなかった広大な範囲に細石器を含む遺跡が確認されている。遺跡数はそれ以前とは比べものにならないくらい多くなる。東アジアの日本列島においても、特に北海道などにおいて、遺跡の数が激増することが確認されている。環境の変化の影響もないわけではないが、細石器化の影響も見逃してはならないことである。道具の軽量化と部分品化がこれを可能にしたことである。このことが行動範囲の広域化をもたらし、従来利用していなかった地点あるいは地域にある資源の利用を可能にしたのであろう。一部の地域ではあるが、この後の展開につながる、新石器文化の誕生と発達を可能にした新たな資源の採用もなされている。広域に展開できたことがこうしたことを可能にしたのであろう。

しかし、人類が生活空間を大きく拡大するのは、新石器文化の展開を待たねばならない。時間あたりの効率から面積あたりの効率への転換、それを可能にする個々の地点における自然環境の在り方に応じた新たな生業の確立、それに適応するための新石器文化的な道具の考案、さらに定住に伴う個々の居住地点ごとの資源の不均衡を解消するための交易の展開などのさまざまな条件の整備を待って、人類の居住空間が格段に広がることになる。これが種々の意味で今日の社会の基礎を作ることになる。

これには、さまざまな分野にわたる多様なシステムの構築が必要である。まずは定住した地点の

細石器 (VI)

年間を通しての資源の在り方から生業システムを構築していかななくてはならない。それには居住地周辺を自然環境を熟知している必要がある。生業システムを実際に動かす道具の製作とそれに必要な原材料の入手システムを周辺の集落との折り合いをつけつつ構築していくことも重要な要素である。移動生活ならば、さほど問題のなかった種々の地点に散在する多彩な資源をどのようにして具体的に入手するかも重要な課題である。定点に年間を通して居住することになれば、さまざまな資源が折にふれ必要になる。それが自己の領域にあればいいが、ない場合には入手する手段を構築する必要がある。特に比較的狭い範囲で異種の生業を行わざるを得ない、あるいは実際に行っている地域においては、交易が生活をしていく上で必須のものになる。こうした状況に対応した、種々の、新たなある程度広域にまたがるさまざまなシステムが構築されないことには新石器文化的な生活は不可能とまではいわなくても、きわめて困難である。こうしたシステムの整備によって、はじめて新石器文化的な生活が安定して営めるようになる。

細石器があまり利用されなかった社会においても新石器文化的な生活様式への転換が独自になされている。異なった方式による新石器文化の出現である。ここでは現状では明らかではないが、細石器に代わるものがその役割をしたものと思われる。新しいシステムへの転換も別の方式によるのであろう。新石器文化的な生活様式への転換もまた多様なものであった。

細石器化によって果たされた広域にわたる生活の展開と新たな資源の開発がこうしたさまざまなシステムの構築に寄与した役割は大きなものがある。細石器を旧石器文化的な道具の究極の道具として捉えるだけでなく、それが新石器文化の成立と展開に果たした役割についても考慮すべきであろう。道具の機能としてだけでなく、社会の展開に貢献した役割を過小に評価すべきではない。

細石器が人類文化の展開の中で果たした役割は、時間の効率を優先する旧石器時代的な生活様式から定住をして面積の効率を追求する新石器時代的な生活様式への転換をさまざまな面で準備したものと捉えられよう。地域によってその様相は多彩であるが、その自然環境から得られる資源を食糧として用意し、その利用を可能にする生産・調理システムを考案し、その後続く定住を可能にした。地域によっては、異なる環境に適応するためにそれぞれの生業の比率を変え、居住地周辺の生態系と自然環境に応じた複数の生活様式を準備した。複数の生活様式の採用により必然的に生じる、また、定点に生活の根拠地をもつことにより惹き起される資源の不均衡を補うため、交易システムを準備した。このような今日の人類社会の基本になる要件を幅広く準備している。これらすべてに、細石器をもっていた社会は直接的あるいは間接的に関わっている。細石器が人類文化の展開に果たした役割は大きなものがある。

藤 本 強

参 考 文 献

- Allchin, B. and R. 1982 *The Rise of Civilization in India and Pakistan*. Cambridge.
- Fujimoto, T. 1983 Microwear Analysis of Microliths from the Upper and Epi-Paleolithic Assemblages from Palmyra Basin. The University Museum, The University of Tokyo, Bulletin 21 : 131-158.
- 藤本 強 1983a 石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼 (I) 東京大学文学部考古学研究室紀要 2 : 47-75
- 藤本 強 1983b ナイル川流域の後期旧石器文化 考古学雑誌 68 : 496-560
- 藤本 強 1985 華北早期新石器文化の遺跡立地 『日本史の黎明 八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』六興出版 : 479-497
- Fujimoto, T. 1988 Early Cereal Utilization - Sickle Polish on Microliths from the Upper- and Epi-Paleolithic Assemblages from Palmyra Basin, Syria-. In : S. Beyries ed. *Industries Lithiques*. vol. 1 BAR International Series 411 (i) : 165-173.
- 藤本 強 1988 北アフリカの新石器文化『考古学叢考 上巻』吉川弘文館 : 797-823
- 藤本 強 1989 石皿・磨石・石臼・石杵・磨臼 (VI) 東京大学文学部考古学研究室紀要 8 : 107-128
- 藤本 強 1990 細石器 (I) 東京大学文学部考古学研究室紀要 9 : 1-23
- 藤本 強 1992 細石器 (II) 東京大学文学部考古学研究室紀要11 : 125-150
- 藤本 強 1994 細石器 (III) 東京大学文学部考古学研究室紀要12 : 51-71
- 藤本 強 1995 細石器 (IV) 東京大学文学部考古学研究室紀要13 : 143-166.
- 藤本 強 1996 細石器 (V) 東京大学文学部考古学研究室紀要14 : 1-25.
- 藤本 強 1997 定住と道具『住の考古学』東京大学考古学研究室五十周年記念出版 同成社 : 331-343
- Frumkin, G. 1970 *Archaeology in Soviet Central Asia*. Brill.
- 中村慎一 1986 長江下流域新石器文化の研究 東京大学文学部考古学研究室紀要 5 : 125-194
- Phillipson, D.W. 1977 *The Later Prehistory of Eastern and Southern Africa*. London.
- Phillipson, D.W. 1982 The Later Stone Age in sub-Saharan Africa. In : J. D. Clark ed. *The Cambridge History of Africa*. vol. 1 : 410-477

Microliths VI

—The roles of Microliths—

Tsuyoshi FUJIMOTO

In previous articles in this Bulletin, the author has described microliths in northeastern Asia, Europe and western Asia (Fujimoto 1990, 1992, 1994, 1995, 1996). He has mainly analysed them from a functional point of view.

From these works and this article, the following points can be made :

1. There are many differences between the microliths in the western part and those in the eastern part of the Old World. Geometric microliths are commonly seen in the west but are rarely seen in the east. Secondary retouch shows the same distribution. Simple bladelets were used without retouch in the east.

2. A lot of microliths was discarded without use. People selected bladelets appropriate for their purpose among bladelets which were mechanically produced in the east and they were used without retouch. About a half to one-third of bladelets were discarded without use.

3. The change in function of microliths occurred independently from change in type of microliths. The time of the change in function commonly happened at a different time from that of the change in type. They are independent elements in the attributes of microliths.

4. Non-geometric microliths generally appeared first and geometric microliths came later. This feature was seen in western Asia, northern Africa and Europe. It is thought to have been related with the birth and development of geometric microliths.

5. It can be thought that the function of microliths was replaced by various types of arrowheads in the wide regions of the Old World and also by sickle-blades in western Asia. Microliths are thought to have been used in the spot of production such as hunting place or gathering fields. Microliths were very convenient to be used there because they were light and replaceable parts of implements.

6. Microliths did not flourish in southeastern Asia and southern China as in western and northern Asia, northern Africa and Europe. One reason is thought to have been the insufficiency of investigations there but this is not the only reason. The works by

microliths there are assumed to have been not so large as in western and northern Asia, northern Africa and Europe. Plant foods are thought to have been abundantly used there. Microliths were not so useful to gather and process plant foods. Therefore, microliths were not so necessary as in the western part of the Old World.

It is probable that the roles which were accomplished by microliths in the history of humankind were a preparation of the Neolithic in many fields : domesticated plants and animals for daily foods, establishment of processing system, development of various tools for a new way of life, sedentary life, trading system and so on. Also the various living systems were founded in response to varied environmental niches. People in the regions with small amounts of microliths accomplished them in different ways. The ways to the Neolithic and to civilization were various.